

山口喜一郎の外国語教育理論の今日的意味

— 『外国語としての我が国語教授法』(昭8)を中心として—

日本語教育学科 縫部 義憲
(1989年9月20日受理)

A Study on Kiichiro Yamaguchi's Theory of Foreign Language Education

Department of Japanese
Language Education
Yoshinori Nuibe

Abstract: Kiichiro Yamaguchi, the most prominent educator of Japanese language, devised Yamaguchi's Direct Method. It is characterized by the emphasis on the affective and social sides of foreign language teaching, on the significance of life in it, on communication and acquisition, on the harmony of language development and personal development and on the interface between learning and acquisition. The purpose of the present article is to discuss the basic ideas of his direct method from the standpoint of foreign language education in the 80s.

The article consists of 6 sections. The first one gives the purpose of the article. The second focuses on Yamaguchi's view of language. He discusses semantics by dividing meaning and sense. The third deals with the significance of life in FL teaching. This is the essence of the idea "acquisition". It is clear that he basically supported the interface hypothesis, though he didn't know the technical terminology in those days. The fifth summarizes his whole idea of his direct method. Its main topic is his view of language education: language teaching and language learning. His view of communication presents us new insights of language education today. The last one is the concluding remarks.

1. 本論文の目的

山口喜一郎氏は、「国語講習員」として、明治29年12月に台湾に渡り、台湾人教育に携わった。明治44年5月朝鮮に転じ、高等普通学校付属普通学校の主事として朝鮮人の初等教育と師範教育とに関わり、この間に「山口市直接法」の実践に努めると共に、教科書の編集に関係した。大正14年10月に満州に転じ、旅順にて関東州人の中等教育に携わり、昭和5年12月に至り退職した。このように、台湾・朝鮮・満州における1897年から1930年までの33年間の「外国語としての」日本語教育の研究と実践に捧げた。

氏は、異言語民族である台湾人や朝鮮人の幼年子弟に日本語を教授するに当り、大正の中頃から、「従来の教授法が言語の器械観に立ったもので真に学習者をして言葉の生命をつかませるまでいかないことを痛

感した。」(1頁)この問題意識が、氏の教授法「山口市直接法」開発の動機となっている。氏の考える良い教授法は、学習者にその学ぶべきことの本質的なものを経験させ体得させることを目指し、実際生活の本質的なものを破ったり壊したりするものではないと述べている。ここに山口市直接法の独自の世界があると言えるが、これは、F. GouinのDirect Method (Psychological Method)に影響を受けながら、それを氏の言語観に適合させて考察された独自の理論とその方法である。

さて、本論文は、言語の器械観を批判し、言葉の生命をつかませることに氏の直接法がどのような解答を与えているかを、代表的著作『外国語としての我が国語教授法』(昭和8年)を中心にして、今日の外国語教育理論や第2言語習得理論の観点から解明することが目的である。従来の外国語教授法は機械的方法だ

という批判や見解は沢山出されているが、「学習に伴う日本語の生活化」を外国語習得の基本に据え、その観点から機械的教授法を批判したところに山口氏の理論の独自性と卓越性がある。

2. 言語観

まず、山口氏の言語観を調べることから始める。言語は、外部的なものとの内部的なものから成るとする。外部的なものは耳や口で感覚されるもので、感覚されないものが内部的なものとなる。したがって、言語は音声と思想・感情から成り立っていると見る。なお文字は音声の符牒として加わるが、これも外部的なものである。ここに文字言語より音声言語重視 (Speech Primacy) の考えがはっきり出ている。

通常、言語の音声や文字に対して、思想や感情を意義／意味と言い、音声や文字を記号と言う。そして、音声／文字と意義を言語の要素と言う。言語の意義とは、「その音韻的形態ないしは文字と結合するある事物の表象」(29頁)である。そこで、言語は、音声と文字を記号として意義を表すものである、ということになる。では、山口氏の言語の定義を検討してみよう。

試みに言葉とは何かといふ問を与えられたとすると、或る社会に定められた一定の音声を結び合わせて、それで思想なり感情なり心に思ふところを表現したものだといふであらふ。(27頁)

この定義において、既述した音声言語重視の考えとともに、言語とその意義である思想・感情との関係に注目したい。前者は、言語の第1次的なものは音声であり、文字はその第2次的なものである、という立場である。後者は、言語と意義(思想・感情)との関係であるが、この点について氏は次のように説明している。

言葉は直接に感情を表現する事が出来ず、唯思想を表現するのみであるが、思想は事物の表象だといふ。その表象は……全く概念である。(30頁)

つまり、言葉の意味としての思想は概念であり、決して具体的な事物の表象ではない。言葉はそれ自身決して具体的な個別的な直観を示すものでなく、常に一般的な概念を表すだけである。ところが、普通言語の意味という場合、概念と具体的表象の関係も、又具体的表象と感情の関係も一緒くたにして、これを思想感情と言い、全て言語がこれを表していると批判している。

繰り返すと、言語は、その形態である音声や文字を

記号として、事物の概念を意味として指示するのみであるが、更に、事物の概念は事物の意味と記号関係を形成することから、「事物に対する価値的意味にまで結びつき、人間の感情をも指標し得るのである」(44頁)。表層の概念レベルが深層の感情レベルまで、言語の意味が深まったとき、それを「感情負荷」(affective loading)と呼んでいる。これは、学習対象に自己(の感情)を関わらせることを言う。こうして得られた言語が「内発的言語」(language from within)なのである。さて、事物の間の意味は、事物そのものにつけられたものでなくてはならず、「客観的な存在」に「精神的なもの」が付加されたときに、「存在」が記号となり、「精神的なもの」が意味となる。

たとえば、母が子に乳を飲ませるという事実は、それを単なる「存在」として考えれば、子供を飢えさせないでよく育てるということがその意味となり、それを「価値としての意味づけ」をすると、母性愛が意味となるのである。

こうして、言語の意味は、「存在」として見た場合の抽象的一般的意味である「事物の概念」及び具体的な意味や個人的感情である「精神的なもの」としての「事物の意味」を区別する必要があることになる。

図1は山口氏の言語観を筆者がまとめたものであるが、以下で氏の言語観を補足しながら説明する。既述したように、言語の意味としての思想は概念であって、決して具体的な事物の表象ではない、というのが氏の意味論の基本的立場であった。事物の概念の特性は一般性であり、これは知的機能によって、学習者誰にとっても共通なものとして取り入れられる。これに対して、事物の意味は具体的な事物の表象及び感情であるが、これは独自性を特性とし、感情的機能が関与する。この両者を統合するのが「言語活動」ということになる。

山口氏は、言語活動における情意変数の重要性を早くから気付いていた。H. Palmer の langue と parole の区別と類似した概念を提起しているが、パーマーと

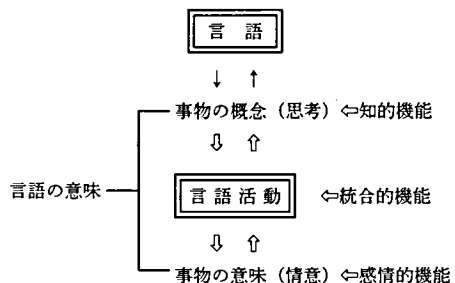


図1. 言語の意味

の基本的相違点は、パーマーは教授の立場が中心であったために、学習者要因である情意性を言語活動にきちんと位置づけていないことである。山口氏の言語活動とパーマーのパロールの違いはそこにある。山口氏の偉大さは、パーマーのパロールに情意的要因を付加していることである。ただ、山口氏自体、外国語学習成立における情意性の働きをどの程度認識していたかは不明である。

3. 生活による言葉の習得 (Acquisition)

次に、言語は直接的には具体的表象や感情を指示し、表現することができないので、事物の概念と事物の意味を区別し、この二者が言語活動にどのように結び合うのかを考察しなくてはならない。言語記号とその意味である事物の概念とは全く偶然的なものであり、況んや事物の意味とは全然無関係であるのに、前者の外部的なものがどうして後者の内部的なものとは結合し得るのであろうか。換言すれば、言語とその意味である事物の概念、そして事物の意味の三者がどのように結合するのかという疑問である。この問いに対して、山口氏は次のように論じている。

それには只この三者の同時経験による外はない。人間の生活に言葉が使用されて、言葉とその意味と事物の意味との連絡が成り立つ、緊密な記号関係が形成されねば、言語の働きが顕はれない。この三者の同時経験によって、外部的な言葉が意識の内面的な結合に入り込み生命を持ち得るのである。故に、言葉が言葉として其の働きを顕はすには、第1に其の意味であるところの概念と結び付かねばならないが、その概念の背景に事物の意味の意識がなくてはならない。事物の意味は経験なり体験なりによって体認体得すべきものであるから、結局言葉は生活に結び付くことによって言葉となり得るものである。(一部現代語に書き改めている。)(50頁)

ここに明確に述べられているように、「人間の生活に言葉が使用される」ことによりこの三者を結合することができ、その結果言語が習得されていくというわけである。「言葉の生活をする」という氏独特の表現が興味深い。「生活」ということの意義は、広く取れば、人間のすることが全てということが出来るが、山口氏は狭く取って、「生活とは、眼前の心身の実際的な要求に応ぜんがために、行ふところの心身全的の活動であり行為である」(82頁)としている。生活ということの特徴は、全て現在に即し、言葉が現下の要求

に直接に関係していることであり、この考えは実存主義哲学のDasein(実存存在)や現象学とかサイコセラピーの“living in the here and now”の哲学に通じる。生活によって言葉を教えることを“here and now teaching”と呼ぶことができ、生きる力を与える言語教育観の芽生えがここにあるように思われる。生きるとは、今ここでの行為の選択をすることであり、それを価値と呼べば、「人が本当に生活をする時には、価値が注意の焦点となり、事物の意味が意識の中心を占めていて、言葉はその影を没している。」(86頁)

このように、生活によって言葉を習得するということは、その言葉を覚え、その言葉を使わねばならない状況において、それを使用することによって初めて自己の心身の要求が満足されるのである。つまり、言葉の習得と同時に自分の要求を充足するという状態が、生活によって言葉を習得する状態なのである。この意味において、学習の場合における生活を都合よく進展させたならば、言葉の習得ばかりでなく「生徒各自の性情を伸ばす上にも効果がある」(162頁)。こうして言葉によって生活が進展し、性格が発達する。

さらに、「生活に言葉を使用する」ということについて考察を深めていく。この点について、山口氏は次のように述べている。

実際の生活に言葉を使用するということは、言葉で生活することであり、体験を言葉にすることである。体験を言葉で表現し、言葉で体験を理解することである。言葉の個人的人格的的特殊の使用といふことである。(12頁)

自己の体験を言葉で表現し、相手に伝え、相手はそれを受取り理解する。このような言語活動においては、「言葉の個人的人格的的特殊の使用」が行われ、その結果、外国語学習が自己の生活に関わりがあると学習者が実感できるようになる。外国語—体験—伝達の関連を次の図のように表すことができる。

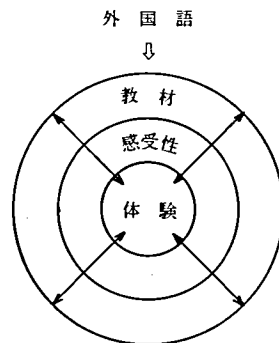


図2. 人格の層構造

実際の生活における体験は、個人の内的生活で生起するもので、非常に個人的な性格である。外国語の取り入れは環境から

の働きかけによるので人格の一番外側に位置する。この両者の結合によって統合学習が行われ、その学習成果は感受性の存在する中間層に貯えられる（縫部、1985）。

図2は、筆者が提唱する Humanistic Language Education の観点から、山口氏の言う言葉の生活化の構造を図示したものである。環境からの働きかけを最も取り入れ易い表層（知的機能）を一番外側に配し、環境からの影響を受け難く遺伝に規定されたその人の独自性が潜む内層（情意的機能）を一番内側に位置させた。表層から学習対象（外国語）を取り入れ、内層でその人独自の考え方、感じ方、欲求パターンなど（体験）が生起する。その両者を言語活動の中で結合するのが中間層（感受性）の機能で、この統合的学習成果が言語的習性や文化的習性として中間層に貯えられる。

では、山口理論の中核をなす実際の生活という概念を詳しく検討してみよう。それは次のような性格を持っているという（11頁）。

- (1) 人間生活
- (2) 目的的生活
- (3) 人格的生活
- (4) 個性的生活
- (5) 対他人的社会的生活

つまり、実際の生活において生ずる事物が、その根底に於いて、人格的色彩に彩られ、人間的感情を含み、全心的な意味を象徴しており、また、実際の生活は、一種の自律的な目的的な自存体であるので、互いにその独立を害うことなく、相互に影響しあってゆく生活なのである。

さらに、実際の生活の特徴は、具体的・特殊的・個性的・流動的・全体的・全心的・社会的であるともいう（19-20頁）。「具体的特殊個性的」であるというのは、その生活の意味が他をもって代置することのできないことであり、「流動的」というのは、その生活の意味が始終変化して、再び繰り返すことがないことである。「全体的」というのは、部分に全体の意味が宿り、部分と全体とが融合していることであり、「全心的」というのは、その活動が全人格の働きとなっている、知情意全心の総動員で行われるというのである。「社会的」というのは、生活における主客両者が相影響して互いにその目的を達し得るということである。

言語学習は、このように人間の営みと捉え、単なる言葉の交流ではなく、それを通しての心の付き合いであるという。つまり、生活の表現としての談話なり文章というものが、ただその表面の事物の概念を表すだけでなく、一語一句に全性格が動き、全感情が底流を

なし、全体験が根底をなしているのである。生活という概念はこのような深い哲学を背景にもっている。

4. 学習による言葉の習得 (Learning)

生活には2通りある。一つはこれまで述べてきたような具体的な生活であり、もう一つは抽象的な生活である。この両者の区別について、山口氏は次のように述べている。

前者（＝具体的な生活）は行為行動の実践的な世界で、其の行動の対象は実際に存在している、個々特殊の意味をもった事物であるが、後者に於いては、生活対象を総べて物と見て、対者の自律的・目的的な生活意義を認めないのである。……概念及びその関係で成り立つ世界で、思惟思索の生活である。そこには、人格的な香気もなく、個性の認識もない。どこまでも抽象的な一般的な意味の徹底を期する生活である。（21頁）

前者と後者の生活は、全ての面に対象的である。後者の場合、それに伴う言葉の意味は、事物の概念であって、実際に存在しているものではない。全く思惟の産物であり、分析総合の結果であるという。抽象の世界は、知的一辺倒の世界であるから、言語の解釈も知的でなくてはならず、情意を認めない。部分が全体を構成し、一語一語の意味で談話・文章全体の意味が決まるのである。

要するに、抽象的な生活は左半球機能である知的・分析的・論理的な学習を招き、具体的な生活は右半球機能である情意的・全体把握的・感情重視の学習をもたらすことになる。このように、我々の生活は二通りあり、言語の意味の認め方にも二つの方向があるとすれば、そのいずれを中心にするかによって、二つの対照的な外国語教授法が生まれてくることになる。

つまり、もし実際の・人格的・具体的生活における言葉の意味を重視する立場の言語観に立つならば、その教授は教材と自己との関わりを実感させ、直接的に、対人的に、社会的に、実践的に行わねばならないことになり、具体的な特殊な個々の場合の意味の理解と表現とが、その主眼とならねばならないし、言葉の意味を思惟的・観念的・非実際のものと捉える立場の言語観に立つものは、その言葉の教授が前者と異なって、観念的になり、論理的知的に傾き、抽象的な一般的な固定した意味の理解と発表に重きを置くようになる。

この二つの見地は、相対立する外国語教授の方法を生み出すことになる。今日の外国語（日本語）教育において、discrete-point approach vs. integrative approach が1つの論争点になっている。前者は抽象的生活に立脚した教授法であり、後者は具体的生活に重きを置く教授法ということになる。言葉の習得には、实际生活によるものと、学習によるものがある。母国語習得は前者により、外国語習得は現実には概ね後者によっている。山口市直接法は、後者のアプローチに重きを置きながら、両者の統合を目指す折衷式教授法の立場を取っている。

さて、本節では、生活によらないで、学習によって言葉を習得するとはどういうことなのかを論じていく。まず、「学習」は言語習得にどのような貢献があるかと言えば、「事実の範囲を拡め、眼界を展開させ、経験を拡充させて、言葉を量的にも質的にも向上させること、学習が生活と並行することによって生活に資すると共に生活によって学習した言葉に生気を吹き込むことができる」(97-98頁)という点である。

つまり、学習活動の第1の貢献は、静的な言語知識の量的質的な拡充であり、この学習活動に伴う言語活動(生活による習得)によって動的な言語知識を獲得することができるわけである。山口氏の主張をまとめると、学習による習得は次の特徴や欠点を持っている。

- (1) 教えよう習おうという風に、教授学習の対立が全ての態度方法を規定する。
- (2) 教材も教授法も教師が絶対的な決定者である。
- (3) 知る知らないということが基調となって談話が進むので、その様式は問答が主となる。
- (4) 教師は教えるがために教え、学習者は習わんがために話す。
- (5) 言語上の誤りはこと細かく厳しく訂正され、全意識は言語に注がれる。
- (6) 教師と学習者の間に情意的交通というものが、言葉の教材を通して行われることがなく、知的冷淡な色調が言語習得の全面にわたって強くなる。
- (7) 話者も聴者も事物の意味に集中しないで、言語に意識が集中する。
- (8) 語調より個々の発音を先ずつかむ。語調は情意の表現に関係する。
- (9) 言葉の意味は分析的・知的であり、概念的・固定的・一般的で、情意的な余意の含蓄を許さない。
- (10) 学習者の直前の現実の必要に基づくものでなく、予想された必要に応じようというので、直接性の乏しいものである。
- (11) 心理発達と言葉の発達が並行していない。
- (12) 連続的に間断なく長時間にわたり言葉が使用さ

れることがない。

- (14) 理解と発表、会得と応用が同時に行われない。
- (15) 反復練習は人為的で、観念的方法で機械的に行われるから、意味からますます離れる。
- (16) 外面的な文法的整合と個々の言語の正確とが主となる。
- (17) 言語使用の機会と学習の機会が並行しない。
- (18) 理解と発表、会得と応用とが分離している。
- (19) 言語活動の時間が少なくて間歇的である。
- (20) 言語環境が学習者の周囲に展開することが少ない。
- (21) 過度に教材が重視されるので、学習者の生活の全部を奪ってしまう。

このように、学習活動には様々な内的・外的な不利な条件があるので、学習に伴う生活を排除すると、言語習得の効果を減少させてしまう。通例、教室外では言葉を使用する生活が少ない外国語学習において、言葉の学習に伴って、本当に情意の活動に直接した言葉の生活を体験さず機会を与えることが肝要なのである。山口氏の外国語理論の卓越さは、「学習による言葉の習得」と「实际生活による言葉の習得」の統合を目指したところにある。これは今日論争されている Interface vs. Non-interface Hypothesis に関係する問題であるが、山口氏は Interface Hypothesis を支持する理論的基盤を展開している。

5. 言語活動観

山口氏の外国語教育理論のユニークなことは、「学校生活の外国語化」という提案である。言葉の学習に伴う生活に目標言語を使用するということで、情意の活動に直接した言葉の生活を体験さず機会となる。そのためには、「学習によって習得したものはなるべく生活に、生活にて熟したものは学習に利用するように、学習と生活との間に受授の作用が行われるように努めること」(184頁)が必要である。

この適当な言葉の生活の機会を外国語使用の機会に利用しないで、直接法だの間答法だのといって、特別な場面を設定したところで、実感のある言語活動を与えることは十分ではない。「斯かる教材の實際化も方法の実地化も、その学習に伴ふ生活の外国語化によって、初めて其の効力を顕はし得る。」(165頁)

生活の外国語化によって、教師も生徒も外国語の教授学習と共に、其の生活を生活し、感情意志の交流や考えの交換をし合い、お互いに励まし合いながら、学習を進めてゆけば、温味のある人間味の豊かな外国語教室が生まれてくるのではないかという。ここに、外

国語教育の「人間化」や「個性化」という1970年代以来の外国語教育の課題につながってくる。

さて、生活の外国語化という場合、初級段階からすぐにそれを実行することができるかという疑問が当然湧いてくる。この点に関して、山口氏は次のように述べている。

最初から全部外国語化するか、又は、漸進的に実行するかの問題は、寧ろ理論上のことではなく、実施上の緩急に属することであるから、学習者の員数・年齢等によって斟酌すべきことである。(171-172頁)

具体的には、成人の学習者で、自制心も強く、生活用語の習得に熱心なものであれば、最初から全部外国語を使用するようにすればよい。年齢も若く、クラスサイズも大きく、管理に骨の折れるような場合には、母語使用も交えて、漸進的な方法を採ればよい。あるいは、言語を使用する環境なり「言表事情」なりを母語で説明して、その語に、外国語を教えても、教授法としての直接法の原則を破るものではなく、これが直ちに生活に使用されるので、言葉の意味ではなく、生活事実に関心が向けられるので、全く差し支えがない。

次に、生活の外国語化の教育的意味を考えると、言葉は生活に使用されて、言葉が個性の表現となりその生命と結合した場合、あるいは、言葉が魂の表現となった場合、その意味である内容が教育的となり得ると同時に、真に言葉となるのである(256頁)。このような言葉と自己の生活との結合が言語活動の本質であると山口氏は考えている。外国語教育における「訓育と陶冶の結合」の思想がここにはっきりと打ち出されている。認知と情意の結合学習の原点がここにある。

言語活動というのは intrapersonal communication と interpersonal communication の二つから成り立つものである。前者は自己内省とも言うが、自己とは何者かを知ること(自己覚知)であり、後者はそれを他者に伝達しフィードバックを受け取ることをいう。「言葉が特殊な生命の表現となる」とは、個体内及び個体間コミュニケーションを総称した言い方である。山口氏はこの点に関して次のように述べている。

自分の経験が一個の思想として言葉を得た時に、初めて自分が自分の思想を知ったのである。それと同時に、他に知らせ得たものとなったのである。客観的となり、社会的となったのである。斯様にして、自分の思想を自分に反射させると共に、他人に理會

されることによって、翻って自分を深く知るのである。自分の精神発達を促し、生活を更新するのである。(72頁)

この引用文にある「経験」というのは、自己の内的世界に生起すること一般を指した用語と捉えるべきであろう。B. Galyean 流に言えば、ミーニングノイズ(meaning nodes)ということになる。感覚、感情、イメージ、メタファーなどといった形で生起した思想の原形が、言語表現されるのに適した形態にまとめられて「一個の思想」に情報処理され、それが言語処理されていく。この過程が言語化というわけであるが、それを指して「経験が一個の思想として言葉を得た」と既述している。思考は言葉によってなされ、言葉を通して「自分の思想を知る」のである。

一個の自分の思想が言語化されて、内部的存在から外部的存在へと変身すると、その思想は「客観的」なものとなると同時に、言葉は人と人を結ぶ働きを本来持っているので「社会的」なものとなる。つまり、一個の思想は、個体内(intrapersonal)から個体外(extrapersonal)へと客体化し、それが個体間(interpersonal)の共有となる。ここで言う「客観的」というのは、「自己の思想を自分に反射させる」ことによる自己覚知(self-awareness)と、それが「他人に理解されることによる」自己発見(self-discovery)とを含む。客観性とは、対象を外から意識化する方法と自己と他者との意識的対比を通して達成される。このように、客観化と社会化との間に相互関係が見られ、だからこそ、一層「自分を深く知る」ことができるのである。こうして、言葉が真の言葉になるのである。

言語活動において、言語が表現するものはその人の思想であり、それが他者に伝達されるとき、それを自己表出(self-disclosure)と呼んでいる。他人に理解されることが自分を深く知ることにつながる。自己は他者の鏡を通して明確化される。これが言葉に対する愛と敬を生み出す、として次のように述べている。

言葉が、我々の思想を拡充更新し、全心的活動を促し、精神を発達させ、生活を生新し、伸展させる限りに於て、言葉が外部的な存在から内部的なものとなったのであり、物質的なものが精神的なものとなったのである。存在と意味とが本当に結合して一如となったのである。斯くなった時に、言葉に対する愛と敬が生ずるのである。(73頁)

言葉は、自己を知り、他者を理解し、自己と他者との間のリレーションを作るために存在する。外国語学

習が自己を向上することに貢献すると実感すれば、学習者は内発的に動機づけられる。言葉が思想感情と結合したとき、言葉が自己と結合したと言える。つまり、言葉が外部的な存在から内部的な存在に変化したのである。このとき、思想感情が言葉を求めたとも、言葉が思想感情を求めたとも言える。いずれにせよ、言葉を真の事物の意味から離れて覚えようとしたり、真の生活から遊離して言葉を教えようとしても、言葉に対する「愛と敬」は生じてこない。「愛のないところには本当の知はない。本当の知のないところには働きがない。」(73頁)

言葉の働きがないとは、言葉が真の実用性を持たないということである。実用的な言葉とは、本当にその人の言語活動に役立った言葉のことである。言葉と事物の意味とが結合し、その人の思想感情と結合した言葉こそ実用的なのである。このような結合を可能ならしめるものが言語活動である。外国語教授というのは、要するに、言語活動をさせることであり、言語学習は学習者自身で言語活動をすることである。山口氏によれば、外国語教授は、「非語学的見地に立脚して、当該の教材を実際の言語活動さながらの姿で学習させて、其の特殊具体的な意味に即して、言葉の形態に関する精確な認識を其の堪能を得させる様にするのが要諦」(121頁)なのである。このように、山口氏は、外国語教育の本質を「思考・認識と伝達」と捉え、コミュニケーションをその目標としていたのである。

6. 結語

本論文では、山口市直接法の理論的基盤を明らかにし、今日の外国語教育理論から考察してきた。山口氏の外国語教育理論が、以上明らかにしてきたように、非常な新しさをもち、一貫性を持ち、外国語教育の本質を見事に捉えて理論化していることに驚かされる。本書が出版された昭和8年当時で、今日でも通用する独自の外国語教育理論が構築されていたことは、驚きに値する。

とりわけ、外国語教育における生活の意義、生活の外国語化、学習による習得と生活による習得といった

概念は、教育の本質を見事に捉えた山口氏独特のものである。S. Krashen が区別した Acquisition vs. Learning の概念が、この時期既に本格的に論じられている。山口氏はクラッシュェンとは異なり、Interface Hypothesis の立場を支持する見解を取っていると言えよう。さらに、山口理論の卓越性は、外国語教育における情意的・社会的変数の重要性を提起し、生活という概念との有機的関連性を論じていることである。尤も、これらの変数については十分な論及と理論的發展があったとは言えないが、今日の外国語教育でもまだ十分解明されていない分野でもある。

また、外国語教育における「訓育と陶冶の結合」、すなわち、外国語を学ぶことと同時に人間の発達と人間関係の形成がコミュニケーションを通して実現されるという理念が本書の全編に流れる教育哲学であるように感じ取れた。但し、この点の徹底した説明とそれに基づく実践的取り組みは、今日に至るまで殆ど手つかずの状態であり、今後の外国語教育の課題としなくてはならない。

(註) 本論文中の()内の数字は、全て山口(1933、1988)の頁数である。

参考文献

1. 山口喜一郎『外国語としての我が国語教授法』自家版、昭和8年；冬至書房、昭和63年(復刻版)。
2. 縫部義憲『人間中心の英語教育』ニューベリーハウス出版社、1985年。
3. 宋晩翼「日本語教育基礎論研究(1) — 山口喜一郎の日本語教授論の考察を通して —」『教育学研究紀要』(第二部)中四国教育学会、1988年、34巻、113—118頁。
4. 斎藤修一「[資料]山口喜一郎著「日本語話方入門」(北京大学本)1」『日本語と日本語教育』慶応義塾大学国際センター、1987年、第16号、1—13頁。
5. Krashen, S., and S. Terrell (1987), *The Natural Approach*, Pergamon Press.
6. Galyean, B., (1976), *Language from Within*, Ken Zel Consultant Service.